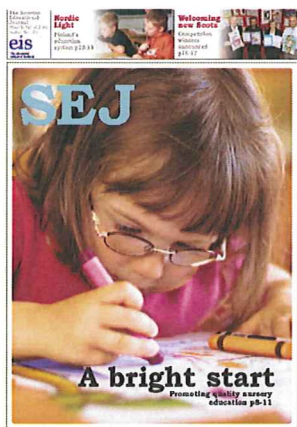


詳細2 EIS「スコットランド教育ジャーナル (SEJ)」(抜粋)



フィンランドの学校を訪問する人たちは最近、学校の廊下で真剣な眼差で様子を観察している。教員や政策担当者は生徒の能力 (ability) についての国際調査でトップを維持している理由を見つけるためにスカンジナビアのこの小国のあとを追跡しているのだ。

PISAの結果が12月に公表された時、フィンランドはふたたび大きな注目を浴びることとなった。フィンランドの生徒たちは科学で一位に、そしてリテラシーと数学で一位と僅差の2位になったからだ。PISAが2000年に始まって以来、フィンランドはあらゆる科目でトップかトップに近い位置を占めてきた。

7歳になると子どもたちは9年間の総合的な学校教育を受けることになる。教科は、フィンランド語・スウェーデン語、外国語、環境学習、市民科 (civics)、宗教・倫理、算数・数学、科学、それに音楽である。基礎教育に内在する価値は人権、平等そして多文化主義である。とくに教員養成でこれらの価値追求が重視されている。また、生徒たちが自分自身の学習に責任を持つように励ますことがフィンランドの学校の特徴になっている。フィンランドの教員は非常に尊敬されている、と紹介されている。

言語が重視されていて、ほとんどの生徒が9年制の学校を卒業する時にはフィンランド語、スウェーデン語そして英語を話すことができる。移民の子どもたちは、できるだけ早期に主流の (mainstream) の学級に統合することを目的とした特別の学校でフィンランド語中心の教育を受ける。同じ国からの移民の子どもが4人以上いる場合には、その子どもたちは母語で授業を受ける権利もある。

フィンランドの教員が誇りをもって話すのは、補習指導制度 (remedial teaching system) である。早くに補習の必要性が認定されるが、烙印を押されることもなく、少人数指導になっている。落第は非常に稀である。総合的な学校制度は幅広く支援を受けているため、私立学校はほとんど見あたらない。総合的な学校を卒業すると、ほとんどの子どもたちが高等学校か職業学校にすすむ。このどちらも選択しない子どもたちは10年生になる。

フィンランドは判で押したように国際的な順位ではトップにいるが、標準テスト結果に基づく「順位一覧表 (league table)」の利用は避けている。

世界銀行とEUの教育アドバイザーになっているパジィ・サーベルク博士 (Dr Pasi Sahberg) は、世界的な傾向となっている標準テストの利用は、フィンランドがそれとは違うモデルで成功を収めているので、ピークを過ぎつつあると考えている。彼は以下のようにも説明してくれた。

「標準テストを利用する傾向がグローバルになる前に、フィンランドは教員の専門性を強固なものにすることにつとめてきました。学校と保護者は、生徒たちがどれだけ学習しているのかについては、外部評価者よりも教員の方がよく知っている」と強く信じてきたのです。」

教員は生徒の標準テストの結果で判断されてはいないし、押しつけ的な学級評価に従ってもいない。そうでなく、教員は社会的に尊敬され信用されている。修士レベルの学位をもった教育スタッフがいるので、学校は知的に豊かな環境に恵まれ、ナショナル・カリキュラムをこなしていくのに相当の自由裁量 (scope) を与えられている。

教職は非常に人気のある職業であり続けており、優秀な高校卒業生を惹きつけている。経験のある学級担任教員の収入は 39,925 ユーロからいまでは 53,000 ユーロ (これがフィンランド教員賃金の中央値) にまで上昇している。だが、初任給が低いことへの不安が存在していることも確かである。実質上ほぼ全員が、国レベルで賃金交渉をする OAJ という一つしかない組合のメンバーになっている。この組合は職業に関わる問題について教員の声を正當に反映していると思なされており、公式の政策作成委員会に代表を送っている。

最近の研究によると、フィンランドの生徒はストレスも不安も少ない。パジィ・サーベルグ博士は、これはフィンランドには高い掛け率のテストがないことがその原因だと考えている。フィンランド語には「työrauha」という言葉がある。これは仕事の遂行に必要な穏やかな雰囲気を表わす言葉であり、よく学校のことに適用されている。学習環境は非常によく考えられており、自然の光を最大限利用する構造になっている。

驚くべきことに、教育費はそれほど多くはない。GDP の 6.1% であり、OECD の平均を少し下回っている。

フィンランドとの比較をする時、文化と歴史が果たしている役割を理解することが重要である。非常に教育を大切にする文化は根深い。教育はハードな労働と並んで、第 2 次世界大戦後に国を再建するのに役だった価値の一つと考えられているからだ。フィンランドはまた、世界一、図書館を利用する国でもある。

教育への信頼と幅広い投資とがフィンランドがこの 2、30 年で良好な経済成長を遂げてきた背景にある。林業に頼った農耕社会から、フィンランドはいまや携帯技術とソフトウェアの主導的な輸出国になっている。

完全な教育制度などはない。だが、フィンランドが教育において高い質と公正さを追求してきたことが感銘をよぶ結果をもたらし、世界の注目を集めている。